働く女性と役割意識
―食生活の視点から―

山田　果奈
HS27-0074A

はじめに

本論では「女性の社会進出と食生活の変化」をテーマとする。今日の日本では年齢問わず仕事をしている女性は珍しくない。だが、依然として家事は女性の仕事という意識が強い。年配の女性は「料理をするのは母親や妻のつとめ」と考える人も少なくないだろう。しかし、仕事をして時間的制約がある中で丹精込めて毎日料理を作るのは難しいことである。そこで、利便性の高い冷凍食品、加工食品、インスタント食品をはじめ、外食や中食が多く利用されるようになり、女性の社会進出は食生活を変えたように思われる。しかし、その一方で仕事より家庭を優先しなければならない意識や、そのような食品を“よくないもの”や、“手作りのほうがいい”と考える意識に関心を持った。第１章では日本における女性の雇用労働の歴史を、第２章ではその逆である家庭内労働について述べる。第３章ではその両方の役割を担う女性について、第４章ではそうした女性たちを調理の手間から解放したであろう、外食・中食・冷凍食品などの登場について、第５章ではそのような食品の登場により意識がどう変化したのかについて論じる、そして第６章、７章では主婦パートの方に毎日の食事づくりについてインタビュー調査を行ったデータの分析を行う。

1　女性の労働の歴史や背景

近代の日本企業は労働力不足を補うために、子育てを終えた主婦をパートとして労働市場に引きだした。女性の社会進出の実情は、正社員が増えたのではなく、パートタイマーが増加したということである。主婦のパート化は「女性は結婚後退職し、出産後子育てが落ち着いたらパート」というライフサイクルを作り出した。しかし、現代の主婦は、夫の稼ぎが不安定なことから子どもが小さいうちからパートとして働きに出ていくようになり、非課税限度額に収めながら正社員並みに働いているのである。

2　家庭内労働

2-1　家事労働

家事労働と市場労働(社会的労働)の違いは、それがどんなに有用であっても、それが家庭の中で行われている限り､タダの労働(無償労働)、すなわちアンペイド・ワークであるという点である（竹中,2011:54)。すなわち家事労働は賃金が支払われないだけで、有用さという点では市場労働と何ら変わりないとも言える。

2-2　性別役割分業

性別役割分業とは、江原・山田（2008）によれば｢外で仕事をしてお金を稼ぐ人を夫(男性)、家の中で家事、育児をする人を妻（女性）に割り当てるという分業形態」のことである。

この性別役割分業は､｢仕事ができる男性が男らしく、家事好きな女性が女らしくみられる」という、ジェンダー・アイデンティティの差に根ざしているのであり、女性は仕事ができなくても、男性は家事ができなくても、それぞれのアイデンティティには響かない。だが、女性には家事をしないと女性としてみられないのではないかという不安が存在する。それが、家事を女性の仕事として割り当てる圧力になっているのである（江原・山田,2008:42-44)。

2-3　料理、調理

品田によれば、女性が手料理を振る舞うことは、家族への愛情や女性らしさの規範が背中を押しているという（品田,2015:18)。それは家族関係を保つことも、家族関係を破壊することもできる。「手料理を振舞えば、家族関係を良好に保つことができる」とは言い切れないが、他の家事と違って、料理は家族関係の構築と密接な関係を持っているのである。賃労働の下で働く女性が増え専業主婦が減っているにもかかわらず、家事の分担が依然として女性に偏っている現状がある。

3　家の外と内、両方で働く女性たち

家庭の外で職をもっているにもかかわらず、家の中でも家事労働に従事している女性は少なくない。日本では、パートタイムでもフルタイムでも「家庭が優先」という意識を持ち働いている女性が多く、主婦パートでも一部は正社員並みに働いていることがあるにも関わらず、家事育児の負担は減っていないのであり、「男は仕事、女は仕事と家庭」という新たな性別役割分業が浸透しているといわれている所以である（大森,2014:152)。

調理に関してみると、NHK の国民生活時間調査（1970年～2015年）によれば、専業・有職関わらず、女性が炊事にかける時間は長く、反対に夫が炊事にかける時間は短く、夫婦間での差は大きい。すなわち、料理の分担は進んでいないのである。女性は愛情や義務感から料理を「日常」のものにし、労働の領域に入っているのに対し、男性の料理は時々、気が向かないと行われないことが多く、後片付けもしないことから「趣味」の領域になっているのである（村上,1993:40-41)。

また、家事代行サービスの登場によって、家事労働は外部化されるようになった。これにより、女性はかつての状況から解放され、自由な時間を確保するのを可能にしていったのである。

4・5　便利な食品やサービスの登場・それによる変化

中食・外食、利便性の高い冷凍食品や加工食品は調理時間の短縮に一役買い、しかも手軽な手段と価格で手に入れることができるようになり、時間短縮を可能にした。いわば、「調理の外部化」である。今日の主婦は核家族化と技術の発展により調理の外部化が容易にできるようになった。

外食・中食が手軽に利用できる世の中になり料理をする女性が減少し、結婚前に料理を習得する女性も減り、便利な食品を利用することに対して「忙しい時には便利だと思う」「市販のインスタント食品はおいしいものが多い」と考える女性が増えてはいるが、依然として半分以上の女性が「市販の惣菜や、店屋ものをそのまま家庭の食卓に乗せることは、いかにも手抜きのようで気がひける」とか、「できあいの食べ物は控えて、手作りの料理を多く出すようにしている」と思っているのである。便利になったとはいえ、その根底では食事を用意することに対する「出来合いの食べ物は便利で美味しいが、手抜きのようで気が引ける」という意識が生じているのである。それはなぜなのだろうか、本論文ではインタビュー調査によって明らかにする。

6　インタビュー調査

筆者のアルバイト先（食料雑貨・青果小売店）で働く、パートタイマー主婦を対象に調査を行った。調査対象はAさん(40代前半)、Bさん(40代前半)、Gさん（20代後半)、Sさん（40代前半)、Yさん（40代後半）の5名である。

質問内容は以下の通りである。

・仕事の基本情報
・家族での食事担当
・食事を用意することへの義務感や責任
・中食、外食などを利用することへの罪悪感や不安はあるか（マイナス部分）
・中食、外食などを利用することで便利なこと

など（プラス部分）
・中食、外食などを利用する頻度
・仕事がある日とない日での食事支度の違い
・独身の時と今とでの食事の用意の違い
・夫と子供で食事の用意に異なるものはあるか
・料理しない母親をどう思うか

7　分析

7-1 役割意識

今回対象となったパート主婦たちは、共働きであるにも関わらず夫に家事参加への期待をしていないこと、夫が妻に対し専業主婦を希望している場合はもちろん、希望していなくても「仕方なく」、「自分はパートでお金を稼いでいないから」、「夫は隠れ亭主関白だから」、「作らなきゃ食べられないから」と、夫の希望の有無に関わらず自分が料理をする役目を引き受けていることが分かった。

また、そういった役割意識は本人の外での勤務時間といった仕事の度合いに影響されていないことが分かった。G さんは週 5 日働いているにも関わらず、夫が専業主婦希望であるため料理は自分の仕事であるとしているが、同様に週 4 日働いている Y さんは、誰もやらないからやっているだけで料理は自分の仕事だとは思っていない。一方で B さんは夫ができれば働かないでほしいと希望しているため週 3 日の勤務に抑え料理を自分の仕事と考えているが、同じく週 3 日勤務の S さんは、特に自分の役割とは思っていないが料理が好きだから担当している（S さんは食べることが好きなので栄養士の資格を持っている方である。）。

しかし、A さんは「健康食が好きだから中食外食（を利用すること）に罪悪感はあるけど、料理しない母親はそれでいいと思う」と話していたが、Y さん・G さんは「中食外食を利用することに罪悪感はないけど、料理しない母親はまずい、ドン引きする」といった考えを持っていた。すなわち、「中食外食に対する罪悪感」と「料理をすることへの役割意識」には“ずれ”が生じており、必ずしもつながりがあるわけではないということが浮き彫りになった。

7-2 料理に対する愛情

一方で子供がいる女性たちは、「料理は夫のためとは思わない」と発言していたにも関わらず、A さんは「旦那がいる日は１品おかずを増やす」、G さんは「旦那さんがいる日は３品は作るようにしている」、Y さんは「旦那さんがいない日は麺にする」と語っており、「夫のためとは思わない」と言いながらもきちんとした食事を用意しているという矛盾した実態があることが分かる。子供がいる女性がきちんと料理を作ろうとするのは、夫への愛情があるからではなく、「夫は隠れ亭主関白」（A さん）といった無言の圧力や、「誰もやらないから、作らなきゃ食べられない」（S さん、Y さん）といった諦めや、「夫は専業主婦希望だから」（G さん）といったやむをえない状況や夫からの期待に対処しているために生じているのである。また、G さんの場合、夫がいなくて自分と子供だけの日はむしろ中食外食を使っており、子供に対する愛情を表現するために料理をしているとも言い難い。したがって、品田（2015）の言うような「家族への愛情を手作り料理で表現すべしといった規範が背中を押しているから、女性は家族を大切だと思って料理をしている」（品田，2015:18）といった、「女性は愛情を表現するべく料理をしている」という考え方は今回のケースにはあてはまらないのである。

結論

１章では、家庭内の自分の役割を考慮しパートタイマーとして働く女性が増え、子供が小さいうちから社員並みに働いているパートタイマー主婦が増えていること、２章では家庭内の労働、すなわち家事労働の定義や料理をすることに対する意義や、女性に家事労働を担わせてきた要因は性別役割分業であると説明されていることを確認した。３章では、外での労働と家庭

内労働の両方を担う女性と、夫婦間での家事分担の実態、すなわち日本の男性は労働時間が長く、ジェンダー・アイデンティティにより家事にかける時間が非常に少ない状況や、家事労働に従事する女性を解放したであろう家事労働の外部化が生じたことを見てきた。４章・５章では家事労働の外部化の中で、インスタント食品や冷凍食品をふくめた中食や外食が次々と利用され、発展していったということを確認した。それにより､「外食や中食に頼ることが手抜きである」という考えを持つ人が年々減り、料理をする女性が減ったということを確認したが、同時に依然として半分以上が「外食や中食を使うことは手抜きで気が引ける」と思っているということに注目した。そして、６章ではなぜそのような料理に対する意識の実態が生じているのかを明らかにするためにパートタイマーの主婦5 名を対象にインタビュー調査を行った概要を紹介し、７章ではその分析をした。その結果、「中食外食に対する罪悪感」と「料理をすることへの役割意識」には“ずれ”が生じていることと､「夫のためとは思わない」と言いながらもきちんとした食事を用意しているという、二つの矛盾があることが分かった。つまり、女性は料理で愛情を示すべしという規範よりも、女性が料理をすべきといった夫や社会の規範の方が強く働いていたのである。

妻は夫に愛情がないわけではないだろうが、料理を作ることを知らないうちに女性に期待し、役割だとしてしまっている夫の存在に加え、女性は料理をつくるべきという社会的な役割意識の存在が、料理の外部化に対する否定的な考えを生んでいるのではないだろうか。

文献（抜粋）

江原由美子・山田昌弘,2008『岩波テキストブックスα　ジェンダーの社会学入門』岩波書店.

大森真紀,2014『世紀転換期の女性労働　1990年代～2000年代』法律文化社.

品田知美、野田潤、畠山洋輔編,2015『平成の家族と食』晶文社.

竹中恵美子,2011『竹中恵美子著作集Ⅳ　家事労働（アンペイド・ワーク）論』明石書店.

本田一成,2010『主婦パート　最大の非正規雇用』集英社新書.

村上紀子,2000「「男と料理」を女の側からみると」竹井恵美子編『食の文化フォーラム 18 食とジェンダー』ドメス出版　所収.

村上紀子,1993「外食の時代」田村眞八郎・石毛直道編『食の文化フォーラム　外食の文化』ドメス出版　所収.